※敬称略

令和５年度　第２回碧南市スポーツ推進審議会　議事録

日時　令和６年３月７日（木）
　　午後１時２８分～午後２時２１分
会場　碧南市臨海体育館　第２体育室
進行　スポーツ課長　中嶋忠彦
欠席　鈴木尚哉、青木明美

○　市民憲章唱和（教育部長　岡崎康浩）

１　教育長挨拶（教育長　生田弘幸）

２　会長挨拶（会長　伴野義雄）

３　議題

(1) 令和５年度スポーツ課事業報告について
　スポーツ課スポーツ係長　鈴木章宏　資料に沿って説明
～説明後質疑応答～

委員 A　レクリエーション協会について７５周年事業においてどういった活動を実施したのか。

事務局　例年行っている全国一斉あそびの日キャンペーンにて、ボッチャ大会を開催するなどして、例年より規模を拡大して実施した。また、ボッチャの大会を開催するにあたり、ボッチャ講習会を５月に碧南市レクリエーション協会員を中心に行った。

委員 A　スポーツ協会はどうか。

事務局　スポーツ協会は、バレーボール協会がジェイテクトの選手を招聘し、教室やイベントを実施した。

委員 B　新川中学校と西端中学校のグラウンド LED 化とあるが、市内その他の学校はどのような状況か。

事務局　中央中学校と東中学校は昨年度末にLED化を実施した。南中学校に関しては、グラウンドに照明塔がないためLED化実施していない。そのため夜間に開放している４校すべてでLED化を実施した。

委員Ｃ　碧南駅伝について、今回は職員も動員したが、例年は動員がなかった。今回どのような経緯で職員を動員することになったのか。

事務局　昨年度コロナがあけて４年ぶりの開催となった。コロナ前は参加チーム数が１００チーム近く集まっていたが、コロナ明けということもあり同様のチーム数が集まる見込みがなかった。しかし、事務局や実行委員会としては実施したいという思いが強く、以前まで交通整理員が３人/１チームだったものを、チームが参加しやすいように２人/１チームに変更した。参加チーム数が８０チームほどであれば職員の動員をしなくても良かったが、昨年度は参加が５５チームほどでかなりチーム数が減少した。足りないチームの交通整理員を補充するため、昨年は全庁的にボランティアを募集した。今年度も同様にチームが参加しやすいように交通整理員を２人/１チームにしたが、思うように参加チーム数が伸びず、教育部を中心に職員を動員した。次年度以降は実行委員会でも職員の動員についてより議論を交わし、交通整理員を３人/１チームに戻すなどの提案を事務局からしようと思う。

委員Ｄ　スポーツ教室について、参加料を減額することはできないのか。

事務局　教室の参加人数によって講師配置の人数が変わってくる。人気教室になると講師が３人以上必要になり、費用がかさむこともあるが、講師が１人で済む教室もある。そういった教室に関しては参加料を抑えることができる可能性もあるため、参加料については次年度以降の課題として認識している。

委員Ｅ　教室の参加料について、総合型でも教室運営を行っているが、講師の質や人数を確保するためには運営としては参加料をあげたいところ。そういった事情もあるということを知ってもらいたい。

事務局　総合型の教室と市の教室、どちらも足並みをそろえていく必要があるため協議を重ねていく。

委員Ｆ　１ページ目の表について、参加人数の横に目標参加人数を付け加えるとよいのではないか。目標を付け加えることで、目標を達成するために何ができたのか、何が足りなかったのかを考えるきっかけになる。

事務局　承知した。次年度から資料の作り方を工夫する。

委員Ａ　２ページ目の(ｳ)の表について、参加人数がすべて切りのいい数字になっているが、ありえないと思う。どういったことか。

事務局　選手としての参加人数だけではなく、観客の人数も入っているため、このような大まかな数字になっている。

委員Ａ　では、観客の人数と選手の人数を分けるように記載をしてほしい。

事務局　承知した。

委員Ｇ　Ｖリーグは、どれくらいの観客が入っているか。

事務局　通常の３階の観客席だけでなく、２階のアリーナにもいすを並べて観客席を作っている。ほぼ満杯の集客になっている。

(2) 令和６年度スポーツ課事業計画について

スポーツ課スポーツ係長　鈴木章宏　資料に沿って説明

～説明後質疑応答～

委員Ａ　次年度、新規で計画している事業はありますか。

事務局　新規で計画している事業は無いが、今年Ｖリーグのホーム試合は３試合だったが、次年度は最大９試合を予定している。また、ビーチサッカーの大会について、例年は大人のみ開催していたが、次年度からは子供の部も併設する予定である。

委員Ａ　愛知県から部活の関係で指導者が足りないというニュースがあったが、指導者の募集などについて県から市に何か動きはあったか。他にも碧南市は現状何人ほど足りなくて、今後どのような動きをしていく予定か。

事務局　指導者の確保というのはスポーツ課としても最大の課題だと考えている。小学校の先生を中心に指導者の登録を進めており、現在１００名近くが指

導者登録をしてくれている。そこから種目の割り振りを検討していくため、現時点で何人足りないということまではわからない。

教育長　部活動の地域移行という国策がそんな簡単には進まない。子どもたちのためになるように、少しでも専門性のある方に教えていいただいて、スポーツをする環境を整えていく。しかし、教師が部活動を社会に丸投げするという話を私はしたくない。教師が子どもたちに教えていき、専門性のある方に補助に回ってもらう、そういった方針で進める。小学校の教師は部活がないので現状でも人を集めやすい。そういった取り組みの成果もあり、現時点でほとんどの種目で講師の人数は８割ほど集まっている。残りの２割くらいで満足に足りていない種目もあるが、徐々に補充していく予定。少子化が進んでおり、学校によっては部活動が成りたたないものも増えていく。小さな地域で学校に通わないといけないため、部活動の選択肢も奪われるという不平等も発生してしまう。そんな事態を避けるために拠点校部活動というものを４月から実施する。A 中学校に在学していても、B 中学校の部活動に参加できる。一つの学校単位でチームを組むのではなく、碧南市という大きな枠組みでチームを作り、部活動の大会に出場する。そういった試みを実施していく。拠点校部活動では、教師と地域の方が生徒に指導を行う。学校の教師は、教科の専門性はあるが、部活動の専門性があるわけではない。教師だけでは足りない競技の専門性を補うために地域の支援をより一層強くしていく。どうしても補えないところは教師だけでやっているが、支援の呼びかけは続けていく。碧南市はスポーツ協会の理解が非常に深い。定期的に会合を行い、各団体の代表が連絡を取り合っている。そういった事情もあり、部活動支援についての充実度について碧南市は、県下トップを走っている。今後２年間移行期間を設け、ある程度完成させる。今は学校教育課が主管課であるが、移行期間を終えたらスポーツ課に主管課を移す。そういった計画で部活動以降については進めている。

委員Ｂ　９ページのスローガンでスポーツ実施率 60％を目指しているが、これの結果はどうなっているか。

事務局　平成２６年からこのスローガンを掲げており、当時は４０％だったが直近の市政アンケートでは５３％程度となっている。目標値よりは少ないという現状。

委員Ｂ　いろいろな活動をされているが、周知の方法をより充実させていけば目標値に到達するのではないか。

委員Ａ　昨年までチャレンジデーを実施していたが、これはやめたのか。

事務局　チャレンジデーの主催が笹川財団というところであったが、全国的にチャレンジデーを廃止することとなった。

委員Ａ　先ほども話題にあがったが、周知の方法を拡充し、様々な活動をよりＰＲしていく必要があると感じる。その中で例えば、Ｖリーグの観戦をしに来た人にポイントを付与する。そのポイント数を市で把握して、スポーツをする人に限らずスポーツに関わる人を盛り上げられるといいと思う。市民が自発的にスポーツに関われる環境づくりをしていってほしい。